

# 令和2年度 体育科実践・研究計画

部 員	○伊藤 敏幸, 佐藤 秀恒
-----	---------------

研究テーマ  
**自他の心身と向き合い、考えながら動きを見いだす子どもを育む学び**

## 1 研究テーマについて

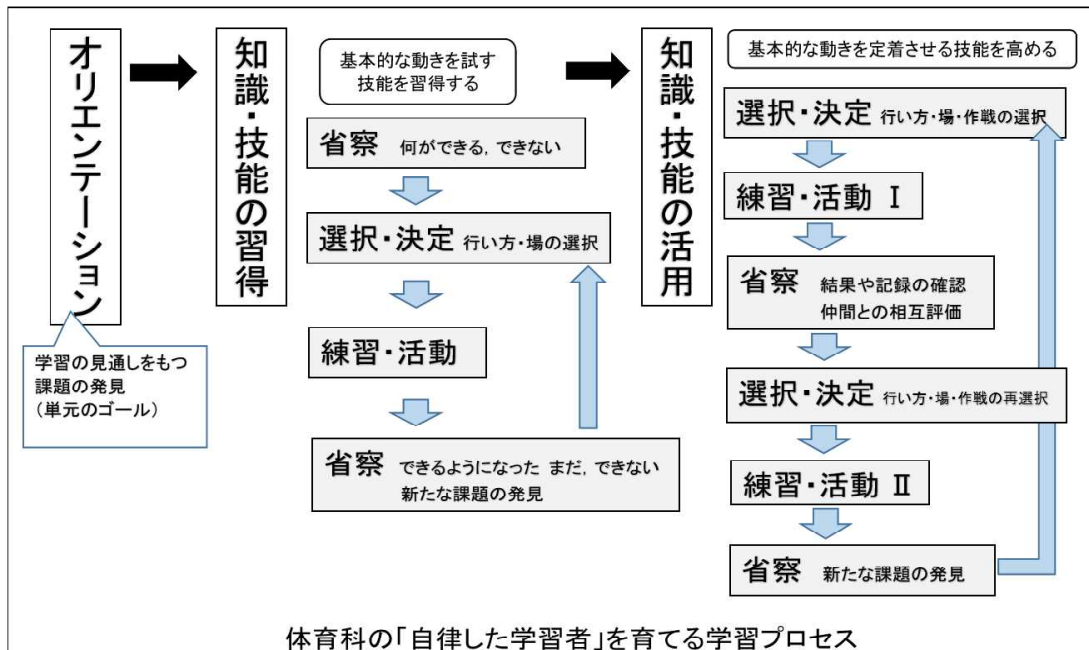
体育科では、体育や保健の「見方・考え方」を働かせ、課題解決する学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指している。体育の「見方・考え方」である運動の楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の特性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けることが重要である。

昨年度の成果の一つ目としては、自己の学びをつなげるために3段階の省察の場の位置付けが挙げられる。導入の場面では、前時の課題と本時の学習課題を結び付けて本時の「めあて」をもたせるようにした。展開の場面では、動きのこつを子どもたちの言葉からキーワード化し共有した。自分の課題を解決するために、どんな練習方法や練習の場を選択すればよいかを考えながら活動を進める姿が見られた。終末の場面では、自分の課題を友達の動きと照らし合わせながら見たり、解決できなかったことを友達とアドバイスし合ったりする場を設定することで、子どもたちは何を学んだのか何をすべきなのかを明確にすることができた。

また、成果の二つ目は、体育の「見方・考え方」を働かせて、主体的に課題解決できる単元構成の工夫が挙げられる。単元の導入時での試しのゲームや運動から、自分の今できることやできないことを自覚する姿が見られた。自覚的に体育の「見方・考え方」を繰り返し働かせることができるようにするために、ボール運動ではドリルゲームやタスクゲームを位置付けた。課題を意識した学習活動を効果的に取り入れることにより、動きを意識しながら自ら設定した課題を解決する姿が見られた。

しかし、タスクゲームや作戦、活動の場などの選択肢の提示の仕方については課題が残っている。発達段階に応じて、教師の例示から選ぶ段階、学習の中から自分たちで気付いたものから選ぶ段階、自分たちの学習経験や運動経験から自分たちが新たに作り出したものから選ぶ段階と省察を通してステップアップする必要がある。このことから、3年次もこの研究テーマを継続する。

体育科における「自律した学習者」を、心と体を一体として捉え、自分に合う動き方や健康的な過ごし方を考え試しながら、学びの成果と課題を見いだし生涯にわたって運動に親しもうとしたり健康であり続けようとする力を高めていく姿と捉える。また、「学びをつなぐ」を、心や体で感じた感覚と体の動きとを往還させながら、課題を捉え直したり、動きの質を高めたりし、動きの精緻化を図ることと捉える。



体育科においては「学びをつなぎ、資質・能力を高めていく子どもの姿」を以下のように捉えている。

- ・自分の心身の現状から課題を見付け、自ら適切に解決しようとする姿
- ・仲間同士で見合った互いの動きやよりよい考えを伝え合う姿
- ・今まきに行われる動きの中に共通点やこつを生かした動きとの相違点を見付け出す姿
- ・これまでに豊かにしてきた体育や保健の「見方・考え方」を意識しながら自覚的に働かせる姿

## 2 研究の重点

### (1) 動きのこつに着目して、仲間との関わりの中で活用しながら、課題解決に向けて選択・決定する学習を位置付けた単元構成の工夫

子どもたちが課題を自分事として捉え学習を進めていくために、オリエンテーションの中で単元を通しての課題と評価を明確に示すことが必要である。課題が明確になると子どもたちが自分の目指すゴールの姿をはっきりと見通することができる。そこで、自分の現状をとらえる活動を行うことで、子どもたちは自ら課題設定をしていく。さらに、正しく知識・技能を教える場を単元の前半で設定し、子どもたちがより自分の現状を認知できる機会とする。

自分の課題を適切に解決するために、活動する場や作戦、タスクゲームなどを選択して実行できるようにする。低学年では自分たちで適切なものを見付けたり考えたりすることが難しいので、選択して実行するために教師が例示を行う。中学年では、基本の動きを意識して行った感じから見付けたこつやタスクゲームから気付いた作戦などから、自分やチームに合ったものを選んで実行できるようにする。そして高学年では、今までの学習経験や運動経験を基に自分たちで考えたものから選んで実行して課題を解決できるようにしていく。その選択が自分の課題解決にふさわしかったか、その妥当性を判断するために、自分の感覚だけでなく友達や教師との「対話」を重視する。やってみた自分の感覚と他者からのフィードバックから、もう1度活動する場や作戦、タスクゲーム等を通して、解決に向けて学習を続けるための再選択の場を設定する。1時間の中で、解決する活動や作戦などを複数回選んで行い直すことで、自分の課題により適切なアプローチと修正しながら、課題解決のために自ら主体的に学習を進めることができるようにする。

### (2) 運動を通して身に付けたことを次の課題へつなぐ発達段階のステップを意識した効果的な省察の工夫

単元の初めにオリエンテーションとともに、自分の現在の状況を認知するために試しの動き・試しのゲームを設定する。単元を通して身に付けたい力・姿（単元のゴール）をイメージして毎時間のめあてを立てるために、「自分の課題は何か」の問いから学習を始める。次に、子どもが活動内容を決定できるように、その課題を解決するために「何をすべきか」を考える活動を行う。展開や終末では今日身に付いたこつやまだ身に付いていないこつを実感することができるように、仲間や教師との「対話」からそれぞれがフィードバックし合う場を設定する。そこから、次時の課題やめあてを見付けることができるようにする。低学年では、何回成功できたか、○秒でゴールできたなどの具体的な結果、友達や教師によるフィードバックからの省察、中学年では、教師がモデルになったり、仲間の動きを見たりするなど、客観的視点から省察する場面を設ける。そして、高学年では、どうしてその技ができていたのかについて、こつをキーワードに表して他者に説明したり、この作戦を使って成功した理由を他のグループに教えたりするなどの活動を取り入れながら自分で概念化するための省察の場としていきたい。

## 3 研究・研修計画

時 期	主な研究・研修行事	研究・研修内容
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科部会</li> <li>・市体育研究会の提案授業への研究協力</li> <li>・附属中学校公開研究協議会（中止）</li> <li>・附属小学校公開研究協議会（中止）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践・研究計画の確認</li> <li>・市体育研究会との連携</li> <li>・附属中学校との共同実践・研究</li> <li>・授業づくり、授業力の向上、授業を通して重点事項の検証</li> </ul>
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科部会</li> <li>・全市一斉授業研究会</li> <li>・実践発表（11/30）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践・研究の修正</li> <li>・市体育研究会との連携</li> </ul>
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科部会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践・研究のまとめ</li> <li>・大学への研究協力</li> <li>・実践・研究計画の立案（案）</li> </ul>

通年：年間指導計画及び資質・能力表の加除・修正